

私の中学・高校時代には、附設生で、テレビ局に就職したいと言っていた人は一人もいなかったように思うのだが、あとで結局、テレビ局に就職した同級生や先輩・後輩が結構いる。みんな大学に入って東京で暮らすうちに初めて、なんとなくテレビ局を含むマスコミ志望という発想が生まれてくるようだ。たしかに地方にいと、テレビ局への就職というのはあまり現実感がないかもしれない。それに職業として、柔らかすぎるといふか、不まじめといふか、親に言ったら怒られそうとか、笑われそうとか、そういうイメージすらあるかもしれない。

でも、もし興味があるなら、進路としては悪くないと思う。ちなみに、テレビ局の正社員は、驚くほどの高い給料をもらっている（東京の民放のキー局の場合）。でも、人気もすごいから、そう簡単に就職できるわけではない。

ただ、不景気の影響はテレビ局にも波及しており、ここ数年、民放各局は広告収入の低迷に悩んでいる。コマーシャルの出稿量が伸び悩んでいるのだ。つまり、スポンサーがテレビCMにお金をかけなくなってきたということだ。これには、テレビCMという媒体の広告効果に疑問が出てきたということも要因にあるらしい。

さて、そろそろまともに入るが、私が大学を卒業したのは平成3年だが、当時、文系の学生の就職先として人気が高かったのは、金融・保険だった（もちろん今でも人気はあるだろうが、そのころは猫も杓子もという感じだった）。具体的に言うと、銀行、生保、損保、証券券である。まだバブルの余韻があったころである。

中学の剣道部で、彼が部長、私が副部長という役割で、市内大会は三位で突破し、地区大会まで行きました。（しかし、地区大会では直ぐに負けました）それから一〇年以上も経つのだから、時が経つのは早いものです。

現在は、「未来のソニー、ホンダを一〇〇社作る」という経営理念を掲げるドリームインキュベータという会社で、大企業の経営戦略コンサルティングと、ベンチャー企業の経営支援を行っています。大企業に対しては、これまで小売、商社、製造、通信、金融、建設、医薬等の各分野における経営戦略の立案、技術シーズの事業化支援等を担当しました。また、ベンチャー企業に対しては、コンテンツ系ベンチャー企業二社に対し、フルインキュベーション（ビジョン・事業戦略立案、幹部人材採用と育成、資金調達、管理体制構築、営業開拓、現場マネジメント等）を実行中です。様々な幸運に恵まれ、日本のビジネスの最前線では、仕事が出来、日々充実しています。

さて、今回お引き受けするにあたり、轟先生には、「遠慮せずに好きなことを書いて良いでしょうか」という点について確認したところ、「全く問題ない」ということでしたので、皆さんに一番お伝えしたいことを率直にお伝えします。

サブプライムショックを引き金にした世界同時不況により、米国を中心とした資本主義経済が先月で終わりました。これからは、リーマンに代表されるような、お金でお金を生む金融資本の多くが吹き飛び、もの作り、サービスを創出する産業資本に回帰すると見ています。ビジネスの最前線にいと、世界が半世紀以上経験したこと

知つてのとおり、その後、バブルが完全に崩壊し、経営破綻した銀行、保険、証券はいくつもある。附設の同級生や先輩・後輩にも、就職した会社がつぶれたり、転職を余儀なくされた人はたくさんいる。誰もそんなことになるとは思わなかった。また、IT企業なんてそのころはなかったし、携帯電話を持っている人もいなかった。結局、今の時代に、一〇年先を読むなんてことはできない。そういう意味で、一生安心して暮らすと思うなら、やはり間違いないのは、公務員ということになる。

公務員はつまらないと思うなら、自分の好きな業界を選べいいのではないか。

一〇年先に、どの業界の景気がいいかなんて分かるわけがないのだ。

中学三九回生の皆さん、こんにちは。今回、轟先生より執筆依頼があり、喜んでお引き受けしました。私は、行正先生や、池ノ都先生と、附設中高の同期で、寮生活も共にしました。行正先生とは、高校の生徒会で、彼が生徒会長、私が男く祭実行委員長という役割分担でした。（男く祭の時には、彼が卒業生から集めてきた金を、私が一銭も余すことなく使い果たしました。また、池ノ都先生とは、

三つの真実

井上和久（高校四七回生）

がない未曾有の大恐慌がいよいよ始まったと感じています。場合に よっては、一九二九年の世界恐慌並みに長期化する可能性も高いです。日頃、ニュースで、世界同時株安や、極端な円高の情報を見聞きしても、皆さんにとっては割と人ごとだったかと思いますが、これからもっと身近でも衝撃的なことが起きる可能性があり、私たちの生活にも多少の影響が出てくると思います。

ただ、幸いなことに、皆さんが、社会人として活躍するまでに、一〇年弱あります。それまでに、日本と世界が進むべき方向性が見え始めているかと思っています。

このように、混乱している世相だからこそ、皆さんには、高い志と広い視野を持って、附設中学・高校での学校生活を送って頂きたいと思っています。

その際に、これから述べる三つの嘘には、騙されないように気を付けて下さい。

第一の嘘

「東大文科一類または九大医学部に合格すれば、道が開ける」

第二の嘘

「大学受験の方が、部活や生徒会活動よりも大事だ」

第三の嘘

「将来の選抜股をたくさん残すために、将来についてまだ決める必要はない」

卒業から一〇年経ち、今までの自分の経験を振り返ると共に、今の日本の情勢を鑑み、これらは全て嘘だったと考えるようになりま

した。分かりにくいかと思いますが、一つずつ解説していきたいと思っています。

第一の嘘

「東大文科一類または九大医学部に合格すれば、道が開ける」

二〇年以上前の日本では、真実でした。しかし、私自身の経験と、世界において日本が果たすべき役割の変化から、これが嘘であることが説明出来ます。

まず、私の経験からお話しします。私は、二〇〇〇年に東大の文科二類に入学しました。入学して一番初めに感じたのは、「東大のクラスメイトより、附設の仲間の方が、志が高く、魅力的だ」ということです。正直、がっかりしました。また、経営を学びたいという思いで、文科二類に入学したのですが、経営の専門の先生はほとんどいない上、授業は教科書を棒読みするだけのつまらないものでした。授業料は年間七〇万円でしたが、七万円の価値もありませんでした。私の場合、紆余曲折があり、運良く工学部に転部することが出来、素晴らしい研究室に出逢えたので良かったのですが、多くの東大生が、学歴以外の何も手に入れられずに、無益な時間を過ごしています。（特に、文系）そもそも、大学側に教育というサービスを提供するという意識が希薄であることが問題です。

一方で、ドリームインキュベータで新卒採用をしていると、高校卒業して、海外の一流大学（ハーバード、マサチューセッツ等）を卒業した日本人学生に会うことがあります。彼らは、東大生とは、物が違います。話を聞くと、それも当たり前前で、彼らは、二〇歳前

後の四年間を、言語のハンディーキャップを抱えながら、アメリカ人、中国人、インド人と凌ぎを日々削ってきたのです。スタンフォード大学を卒業したある学生は、入学初日に、「教授から語学学校からやり直せ」と言われたことに挫けずに、毎日、教授の自宅に通い詰め、最後は教授の一番のお気に入りになったそうです。こういう挫折を乗り越えてきたという自信が、彼らに迫力を与えています。

また、彼らは、稀少な人材なので、世界の一流企業から大人気です。東大の卒業生は年間三、〇〇〇人もいますが、海外の一流大学の日本人卒業生は、MBA等の社会人向けコースを除けば、一〇〇人もいないでしょう。スタンフォードの大学院を卒業したばかりの二十七歳の友人に、オラクルからマネジャー職で、年俸一千万の提示があったという話も聞きます。

おそらく、五、一〇年後には、日本のトップエリートが、東京大学を目指す時代は終わっています。既に、極端では、海外のオックスフォード大学などに進学する人が出てきているそうです。また、中国の経済成長が続けば、北京大学や清華大学も、今よりも優秀な学生が集まるようになるでしょう。真のエリートは、日本の高校卒業した後は、ハーバード大学や清華大学を目指す時代になっていると見ています。

今、皆さんが、東京大学ではなく、ハーバード大学を目指すことを決めれば、皆さんの人生は劇的に変わります。私が、附設の教師ならば、そのように進路指導しますし、皆さんの立場ならば、必ずそうします。

また、この一〇年のインターネットの普及により、世界の距離が、

確実に縮まりました。二〇年前には考えられなかったようなコストで、世界中の情報を入手することが出来、世界中の人々と繋がる事が出来るようになりました。例えば、今回の原稿依頼も、轟先生から依頼メールが届いた三分後に、承諾の返事を書いていました。私達が、男く祭で、社会人も含めた文集を作った一〇年前は、インターネットが普及し始めたばかりで、自宅に電話しても不在で捕まらずに、原稿集めが中々進まないという状況でした。二〇年前だったら、もっと大変だったでしょう。

今は、海外の情報にも簡単にアクセス出来るし、海外人材とすぐに繋がります。皆さんも、イチロー（マリナーズ）や中村俊輔（セルティック）をはじめとする、スター選手が次々と海外に移籍し、活躍している様子はテレビで見ているかと思えます。これは、スポーツだけでなく、政治や経済でも、グローバルで活躍する日本人はもっと増えてくると思います。

現在は、明治維新と同様に、政治、経済、社会が、大きくモデルチェンジする必要があります。ただし、明治維新とは違って、単純に欧米の真似をすればよいというわけではなく、日本発の新しいモデルを自ら生み出し、世界に発信する必要があります。東京大学の小宮山総長は、「日本は、『課題先進国』である」と述べています。「課題先進国」とは、世界でまだ誰も解決したことがない課題が日本には溢れているという意味です。日本には、エネルギー問題、廃棄物の増加、環境汚染、少子化、高齢化、といった多くの課題を抱えています。これらは、資源に乏しい狭い国土に、大きな人口と高度に産業化された経済を擁する先進国で

あるという日本の特徴ゆえの課題です。近い将来、中国やインドが先進国の仲間入りをした時に、同じ課題をかけることになりまし、エネルギーが枯渇すれば、日本が培ってきた省エネ技術が、より注目を浴びることになるでしょう。原油高になって、国土の広いアメリカで、燃費の悪いアメ車が全く売れなくなり、トヨタが誇る低燃費のハイブリットカー「プリウス」が支持されるようになったのは、その良い証左でしょう。

つまり、今後は、世界中が抱える問題において、日本がリーダーシップを発揮していく必要性が出て来ています。しかし、日本人の意識は、まだまだ内向きです。全人教育を掲げ、リーダーを育成する気概のある附設においては、是非とも世界に目を向けて頂きたいと考えています。

私自身は、高校を卒業して以降、自分なりに道を開いてきて、二八歳で、東証一部企業の中間管理職を務めさせて頂いているものの、それは附設中高時代からの延長上にしかなく、まだまだ大きなジャンプをしている感じはしません。これからも日本にいればそれなりに頑張れるイメージは湧きますが、だからといって、いつまでも日本にいても良いのかという疑問を持っています。三年以内には、海外にチャレンジするつもりです。そのために、能面を彫りながら、日本文化を学びつつ、英語の勉強を再度始めています。

ついでに、そうした観点から、もう一つ付け加えると、附設の卒業生のうち、毎年七〇〜八〇名が医学部に進学している状況にも大きな違和感を覚えます。日本は、少子化の影響もあって、

今後の人的資源も決して恵まれるわけではありません。日本全体の産業の人的資源配分を考えると、優秀な頭脳は、もつと他分野に振り分けるべきではないでしょうか。医療ももちろん重要な課題ですが、食糧、資源、エネルギー等、日本には、より深刻な課題がたくさんあります。潜在能力が高い皆さんには、重要なのに人材が枯渇している産業で、是非活躍して貰いたいと願います。「周りが医者を目指すから、自分もそうしよう」位の志望動機しかない人は、是非共、考え直して欲しいと思います。また、地方だと医者は、他の仕事に比べて給料が高く、やりがいもあると思われるがちですが、東京に出てくれば、もつと給料が良くてやりがいがある仕事はたくさんあります。

病を治すことよりも、病が少ない健全な社会を築く方が、ずっと価値があるとは思いませんか。

第一の真実

「ハーバード大学または清華大学を卒業すれば、道は開ける」

第二の嘘

「大学受験の方が、部活や生徒会活動よりも大事だ」

社会に出て痛感するのは、リーダーが少ないことです。頭が良い人はたくさんいます。しかし、未来のビジョンを描き、周りを巻き込んで引っ張っていけるだけのリーダーシップを持った人は、稀少です。

実社会は、賢さだけでなく、情熱、コミュニケーション力、感受性、体力を含めた総合力勝負です。学校での成績はあまり関係ありません。

第二の真実

「部活や生徒会活動の方が、大学受験より大事だ」

第三の嘘

「将来の選択肢をたくさん残すために、将来についてまだ決める必要はない」

皆さんは、選択しないことで、選択肢が消えていつていることに気付いているでしょうか。極端な例を出すと、スポーツ選手や音楽家として一流になるには、遅くとも小学校から始めないと、間に合いません。イチローが超一流のバッターになったのは、小学校の時からバッティングセンターで一四〇キロの球を毎日打ち続けたからです。

孫正義が、超一流の起業家として活躍しているのは、十六歳の時に、渡米を決意し、十九歳の時に、二〇代で名乗りを上げ、三〇代で軍資金を最低で一、〇〇〇億円貯め、四〇代でひと勝負し、五〇代で事業を完成させ、六〇代で事業を後継者に引き継ぐ」という人生五〇年計画を決めたからです。

自分の例で恐縮ですが、私も、十八歳の時に、一流の商売人になることを決め、修行を始めたから、二十八歳で今のようないいのある仕事につけているのだと思います。普通に大学を過して、普通に社会人になっていたら、とても無理です。

つまり、早く始めれば、それだけ選択肢が広がるのです。選択すること、その先に新たな選択肢があり、どんどん未来が広がっていくということにいち早く気付いた人には、無限の可能性が開けます。

ん。受験勉強で、知識は身につけられても、知力は鍛えられません。知力とは、知識を自分のものとして活用する能力のことです。それは、部活や生徒会において、仲間と共通の目標を掲げ、課題にぶち当たり、苦楽を共にしながらも、乗り越えて行く過程で身に付くものです。

私は、高校時代に、男く祭の実行委員長として、五〇名の実行委員のリーダーを務める機会に恵まれました。それは、今の仕事でも大いに活かされています。仲間を集め、ビジョンと目標を共有し、スケジュールを引いて、小さな事を積み重ねていくやり方は、ビジネスも男く祭もほとんど一緒です。一年間の準備期間の中で、仲間との軋轢や葛藤も、もちろんありましたし、それを忘れさせるような大きな喜びを皆で共有することも出来ました。

今の仕事では、一〇歳以上の年上の同僚や部下（元大手新聞社や元銀行の幹部）もいます。彼らと互いの強みを尊重し合い、チームとして最高のパフォーマンスを発揮するために、最も必要なのは人間力です。

人間力は、受験勉強だけでは学べません。会社の採用面接において、受験エリート程、話を聞いていてつまらないものはありません。ブライドだけは高いから、実際に採用しても、ほとんど使い物になりません。

附設の同級生を見ても、卒業から一〇年経て、決して成績順に活躍しているわけではなく、一つの物事に一生懸命に打ち込む中で、人間力を高めた順に活躍しているという印象です。だからといって、勉強しないでよいと言っているわけではありませんので、そこは誤解なきように。

皆さんは、十三、十四歳かと思いますが、江戸時代は十五歳（数えで十六歳）で元服していました。明治維新を担った坂本龍馬や桂小五郎は、二〇歳前後には大きな志を立て、三〇歳前後には、日本の大変革を担いました。皆さんが、そろそろ将来について考え、行動し始めても決して遅くはないのではないのでしょうか。

将来について考える際に大事なことは、二つあります。一つはフットワークを良くすること。もう一つは問題意識を持つこと。

フットワークを良くするというのは、興味があることにどんどんチャレンジするということです。僕は、運について個人的に研究しています。運を良くするために、一番大事なのは、外向的であることです。理由は簡単で、チャンスは、人から回ってくるものだからです。フットワークを良くして、人との設置面積をあげれば、チャンスが増えるわけです。あとは、そのチャンスの中で当たりを引くかどうかです。「当たり」というのは、誰にとっても「当たり」というものは存在しません。「当たり」とは、その人が進もうとしている方向性の中で、転機となるチャンスです。

一つのチャンスが、「当たり」であるかどうかを決めるのは、一人一人が持つ問題意識です。しっかりと問題意識を持っていれば、自分にとつての「当たり」を引く可能性が高くなります。問題意識がなければ、「当たり」を引くことはありません。まずは、皆さんにとつて身近な問題意識で構いません。部活動のことでも、生徒会のことでも。日々、身近なことに問題意識を持つて取り組んでいけば、徐々に問題意識を持つ視座と視野は広がっていくものです。問題意識を持って、フットワーク良く行動す

れば、必ず道は開けていくはずですよ。

第二の真実

「将来の選択肢を広げるために、将来について今から考え行動すべきだ」

以上、私がお伝えしたい三つの真実は、以下の通りです。

第一の真実

「ハーバード大学または清華大学を卒業すれば、道は開ける」

第二の真実

「部活や生徒会活動の方が、大学受験より大事だ」

第三の真実

「将来の選択肢を広げるために、将来について今から考え行動すべきだ」

私自身、社会人としては未熟ですので、考えが浅はかな所もあるかと思っています。ただ、附設の先輩として、今自分に出来る最大限のアドバイスをしているつもりです。このような意見に感じるところが合った方は、是非、先生方やご両親と議論する中で、自分の頭で咀嚼して頂きたいと思っています。

皆さんに、今まで述べたことをより現実的に捉えて頂くために、私が具体的に出来ることは二つあると考えています。

出来ること①…ご希望があれば、ビジネスの最前線を皆さんにお見せします。

ないほど、先生方が導いて下さったからこそ、今の自分がありません。

皆さんも同じではないでしょうか。皆さんの可能性を信じてくれる人がいて、自身の可能性を信じて頑張れたからこそ、附設という恵まれた環境にいるのではないのでしょうか。このように混迷を極める世の中だからこそ、才能を持って生まれ、社会から才能を育まれている皆さんが、社会に対して恩返しをする責任があるのではないのでしょうか。

まずは自分自身が幸せであることは大事な事だと思います。それを犠牲にしてまで、世の中のために尽くせとまではもうしません。潜在能力が高い皆さんは、自分だけでなく、周りを幸せに出来る存在だと思います。是非とも、より大きな可能性にチャレンジしてみたいかがでしょうか。

附設は、適度に田舎にあり、才能をじっくり育むには良い環境だと思一方で、政治、経済の中心との距離が遠く、若いうちから問題意識を持ち、高い志を掲げ、広い視野を持つには不利な環境だと思います。

ちなみに、灘高校では、若いうちから問題意識を持つて貰おうと、東京で活躍する社会人を訪問する活動を始めているそうです。愛校心のある卒業生が多数協力しているそうです。附設生でも、卒業生を招いて話を聞く活動をしているようですが、よく考えると、本当に第一線で活躍する社会人が、丸一日かけて附設に帰るのは難しいことです。比較的時間に余裕がある学生が訪問する方が、合理的だと思います。また、現場で感じる空気感も大事です。

このような文集は、行動に移す「きっかけ」として意味があり、このような活動を続け、皆さんに可能性を提示している轟先生は、素晴らしい先生だと思います。これから、この「きっかけ」を活かし、行動に移して、自らの道を切り開いていくのは、皆さん自身です。皆さんは、自分が思っている以上に可能性がある存在だと思います。皆さんには、可能性がまだはつきりとみえていないだけです。人は、他人から無理矢理成長させられるものではなく、自らの意志で成長するものです。従って、私は、皆さんを成長させることは出来ませんが、先輩として、皆さんに将来の可能性を提示することは出来ると思います。

私の場合も、先生方に可能性を提示して頂き、自分の可能性を信じて、道を切り開いてきたと思います。田中真弓先生が、保健室にパソコンやワープロを置いて、自由に使わせてくれたこと。男く祭の時に、大津留先生が、大昔の先輩が書いた男く祭に関する論文（徳安論文）を紹介して下さり、それをきっかけに初めて社会人と交流し、目が覚めるような経験をしたこと。卒業してから、大津留先生に商売人になりたいという思いを伝えたところ、孫泰蔵さん（孫正義の弟）宛に、和紙に達筆でしたためられた紹介状を書いてくださり、そのお陰で、ベンチャー企業の最前線で修行が出来たこと。大学のシリコンバレー研修で、日本より進んだベンチャー企業育成のモデルを見て、今の仕事を選んだこと。

附設の授業で教わったことの大部分はもう忘れてしまっていますが、先生方が伝えようとした精神と、提示して下さった可能性こそが財産だと思っています。一人一人の先生をあげればきりが

愛校心がある卒業生ならば、附設生がわざわざ上京してきたならば、一時間ぐらいの時間は割いてくれるでしょう。

皆さんが、久留米に留まっていることで、医者、公務員、サラリーマン以外の職業の社会人と機会が少なく、それによって将来の選択肢が狭められているとしたら、日本にとって大きな損失だと思います。

皆さんからのご希望があれば、私も出来る範囲で、ビジネスの最前線で活躍するビジネスマンと話す機会をアレンジしたいと思います。それが、私が、今一番、附設に出来る恩返しだと考えています。

出来ること②…自分自身が、背中で見せる。

「言うは易し、行うは難し」です。皆さんに、恥じないよう、日々精進したいと思っています。

今回、私がお話したことに対してピンと来た人は、小さなことでも構わないので、是非行動に移していきましょう！

天は自ら助くる者を助く。

未来は誰かに与えられるものではなく、自分で切り開いていくものです。